—Foreword—

エポックメイキングな薬学を目指して：基礎と臨床の架橋となる生命科学

原田慎一,*,a 原　一樹b

Going toward a New Generation of Pharmaceutical Sciences: Bridging Research between Basic and Clinical Pharmaceutics

Shinichi HARADA*,a and Kazuki HARAb

aDepartment of Clinical Pharmacy, School of Pharmaceutucal Sciences, Kobe Gakuin University, 1–1–3 Minatojima, Chuo-ku, Kobe 650–8586, Japan, and bMedicinal Informatics and Research Unit, Faculty of Pharmaceutical Sciences, Fukuoka University, 8–19–1 Nanakuma, Jonan-ku, Fukuoka 814–0180, Japan

ここに記載されている総説は，2009年3月27日に京都で開催された日本薬学会第129年会での大学院生シンポジウム「エポックメイキングな薬学を目指して：基礎と臨床の架橋となる生命科学」という演題で行った発表内容をまとめたものである．

近年，創薬の流れは治療困難な病気を起こす特異的な遺伝子やタンパク質などのターゲットを発見し，それを制御することによって効果的な治療へ結びつけるような新たな展開をみせている．薬学分野の所期の役割として，臨床を見据えた斬新な発想と地道な基礎研究との積み重ねから生まれる「創薬研究」及び，その先の臨床における「薬物の適正使用」を推進することが最も重要であると思われる．この実現には基礎と臨床との密接なつながりが必要不可欠であり，創薬研究から臨床を見据えた討論を行うことは大変意義深いものである．そこで本シンポジウムでは，「エポックメイキングな薬学を目指して」と題し，オーガナイザーである原田慎一（神戸学院大），原　一樹（福岡大）に加え，川浦一晃（熊本大），岡田知子（九州大），山本由似（東北大），金シン（岡山大），牧尾圭悟（福岡大）の薬学の様々な分野において，革新的に時代を開拓する志を持ち，画期的な研究活動を実践している大学院生を一同に会して，「うつ病」，「脳卒中」，「糖尿病」，「アルツハイマー病」，「高血圧症」，「がん」のテーマに関する最新の研究成果を発表し，「基礎と臨床の架橋となる生命科学」について徹底的に討論した．若手ならではの新規性に溢れた研究成果が披露され，それぞれの研究展開に対する発火剤となる多分野間で活発な討論・意見交換ができ，またシンポジウムに参加して頂いた方にとっても充実した時間を共有することができた．

本シンポジウム並びに本誌上シンポジウムを通して，これからの時代を担う若手研究者にとってよい刺激になり，また，これから薬剤師として臨床の現場に立つ方にとっても臨床を見据えた基礎研究の重要性について，各々の意識が高まることができたのなら，本シンポジウムが意味をなすことと考えている．臨床を見据えて行う基礎研究とそれを基に成り立つ臨床，相互の密接なつながりを考えるときに，これをもっと強力なものにすることを念頭に置き，その行程を「薬」の世界に身を置く若い人たちの力で成し遂げていくことが重要であると考えている．本シンポジウムが薬学の更なる発展に寄与できることを期待したい．

最後に，本シンポジウムの開催並びに本誌上シンポジウム執筆にあたり，貴重な機会を与えて頂きました日本薬学会第129年会組織委員長，半田哲郎教授，並びに終始に渡り丁寧な御指導を頂きました日本薬学会役員の皆様，スタッフの方々，そして今回御参加頂きました各大学の先生方並びに御尽力頂いた関係のあるすべての方に，この場をお借りして厚く御礼申し上げます．

aa神戸学院大学薬学部臨床薬学研究室（〒650–8586 神戸市中央区港島1–1–3），b福岡大学薬学部医薬品情報学教室（〒814–0180 福岡市城南区七隈8–19–1）
*e-mail: f9i7eg02@s.kobegakuin.ac.jp
日本薬学会第129年会シンポジウムGS5序文